

関西大学博物館所蔵の「鉢形土器」で新事実を発見

～ 重要文化財修理の際に高橋隆博館長らが考古学的事実として確認 ～

関西大学博物館（高橋隆博館長）は、所蔵する重要文化財「鉢形土器」を復元修理する際に、鉢形土器の底部に人為的な穿孔があることを確認しました。このことは、「土器の底を穿つ」行為が縄文時代前期後半までさかのぼること、それが埋葬に関わる行為であったことを示すもので、縄文時代の埋葬習俗の研究における新発見の事実であると考えられます。

今回修理が施された鉢形土器は、大阪毎日新聞社社長であった本山彦一氏が、大正7年に国府遺跡（大阪府藤井寺市）の大串18号人骨胸部上に置かれた状態で発掘したもの。同氏が大阪府堺市の自宅に設立した『農業博物館本山考古室』に展示した後、昭和30年代はじめに関西大学へその他の資料とともに移管。以来、長らく関西大学で展示されてきました。

重要文化財指定の貴重な資料でありながら、年月の経過により復元部分や接着に劣化が生じていたため、平成18年度になり文化庁と東京文化財研究所、関西大学博物館の三者で協議のうえ、関西大学と東京文化財研究所が「関西大学博物館所蔵 重要文化財 縄文鉢形土器の復元修理」の調査研究の委託契約を締結し、東京文化財研究所保存修復科学センター修復材料研究室の専門家の手により、修理が行われました。

鉢形土器の穿孔は、土器を破壊しないように丁寧に行われていることから、埋葬時に実用品の機能を喪失させてから供えたと考えられます。大串18号人骨とこの鉢形土器は、埋葬者に対する篤く複雑な「副葬」や「供献」の行為が、まさに「埋葬人骨の胸の上で、考古学的事実として確認」できた最古の例であるといえます。

今後、国府遺跡の鉢形土器の土器底部穿孔や埋葬法、日本列島の縄文時代の埋甕や甕棺墓、逆位底部穿孔埋甕、さらには古墳出現期の底部穿孔壺のような類似例の背景にある精神世界、埋葬習俗の出自と系譜について、広く東アジア全体を視野に入れて研究していく必要があります。

なお、修理を終えた国府遺跡資料は、4月8日から関西大学博物館第1展示室で一般にも公開しており、今後とも展示を続けて、学術研究と情報公開推進の一助としていきたいと考えています。

【この件に関するお問合せ先】

関西大学 総合企画室広報課 / 鶴丸、北谷

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL:06-6368-1131 FAX:06-6368-1266

<http://www.kansai-u.ac.jp>